

光明

第拾卷第五號

行さきむかひばかりみて
足もさな見れば
踏みかぶるべきなり
人の上ばかりみて
わがみのうへのことなましなますば
一大事たるべきと仰せられ候。

(御一代問書)

大眞 本日 光明團本部發行

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和三年五月十五日發行(毎月一回十五日發行)

光

明

第拾卷第五號

【定價金拾錢】

◆合掌宣言

第一、我ばこれ久遠劫來の業苦に悩む。されど、傷き痛み憫める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

第二、我はこれ會無一善唯知作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生き給ふみ親、罪惡深重煩惱熾盛の我を其まゝ救ひ給ふ。

第三、恵まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する憐しき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の内に流れたまふ永遠の光明。聞せん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。

第四、悉くは自力小我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我報謝の歡喜に生きん。

第五、「四海の信心の人は皆兄弟」其處に共存の涙わく。共に和ぎ、財賄し、管轄して、相愛に生きん哉。

◆本領

毀譽褒貶に動するなかれ。滿境に失意する勿れ。斷境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に精進せよ。

救はれたる者は立つて、全人類救済のために、熱き血を涙を以て、念佛報謝宣傳のために、濁亂の社會に猛進せよ。

▽ び 叶 の 頭 卷 ▽

人間が人間の問題でゆきつまつた時、

人間の技巧によつては決して解決しない。

人間のはからひは、逃げることに、移ることによつて解決したように思ふ、

はからつて浮ばうとする所に醜い第二第三の苦惱を生み出す。

人間の問題の解決は、更にこれを自然の聲に聞かねばならない。

み法は決して個人所有ではない。如來の血液である。

信は如來へ通する扉である。

人間の問題の解決！ そは如來の願心のうちにのみ動いてゐる。

信仰は人間の問題の究極的解決である。

絶對他力教の本質

住岡狂風

『彌陀の本願まことにておはしますば、釋尊の説教虚言なるべからず。佛説まことにておはしますば、善導の御釋虚言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむねまたもてむなしかるべからずさふらふか、詮するところ愚身の信心におきてはかくのごとし。このうへは念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんども面々の御はからひなりと云々。』



親鸞聖人はすでに金剛の信念を表して、往生はたゞ念佛一つによつて成就してゆく

より外はないと云ひ、善知識法然上人にすかされたてまつりて念佛して地獄におちたりともさらに後悔はないとまで申されました。こうした聖人のお言葉を拜しますと、聖人の信仰はまるで人間中心の信仰のようであります。法然上人を盲信し、所謂善知識だのみにおち入つておられるようであります。はたしてさうでありませうか。今歎異鈔の末節を拜します時、こゝにこの問題は、はつきりと解決されてあります。

絶對他力教は決して人間中心の教ではなくて、如來中心の教であります。英雄崇拜の變形でもなければ、善知識だのみの執着の世界でもありません。

勿論聖人は法然上人の上に如來を見られました。上人の上に如來を拜せられたが故に、法然上人は直ちに如來の化現であると感じられ、ひいて上人の仰せは如來の直説であつたのであります。

よく師匠を信ずるものはやがて師匠を超えて、獨自の世界を極めます。聖人の信せられた法然上人は單なる法然上人ではなくて、如來と一なる上人であります。

法然上人は日本の善導師であります。法然上人は全く善導師をつがれたものであります。

支那の善導師は眞に釋尊のみ教の眞髓にふれて、如來の本願は惡人を正機として救ひたまふことを宣べたまふたのであります。

釋尊出世の本懷はたゞ彌陀の本願をお説きになるためであつたのであります。彌陀の本願は、釋尊となつて應現し、釋尊をして、彌陀の本願と名號とを説かしめたのであります。

かくして、釋尊も、善導も、法然も、みな如來のまますしては、其存在はないのであります。

こゝに嚴平として聖人のみ胸に直接せる救ひのみ手は遂に如來の本願であつたのであります。

『彌陀の本願……………マコトにておはしますば

釋尊の説教そらごとなるべからず

佛説……………マコトにておはしますば

善導の御釋そらごとしたまふべからず

善導の御釋……………マコトならば

法然のおほせそらごとならんや

法然のおほせ……………マコトならば

親鸞がもうすむね、またもてむなしかるべからずさふらうか詮するところ愚身の信心におきてはかくのごとし。』

以上のお言葉を注意致しますと一貫した四つの言葉があります。それは「まこと」であります。

阿彌陀如來……………釋尊……………善導……………法然……………親鸞と、其間を一つに

綴るものは「まこと」でありました。

一切の價値感は『誠哉』の發見によつて成立します。聖人の胸底におこつたこの『誠哉』の信のルツボに、彌陀 釋迦 菩薩 法然 はとかされて一つとなつたのであります。

我等はこの御云棄を拜する時、絶對他力教が、人格の宗教であると共に、又單なる人格の宗教でなかつたことを鮮かに知るものであります。

今まで聖人の信仰は、法然上人中心の人格教であるかのようでありました。然るに一轉してこの末節を拜する時、忽然として聖人は、『彌陀の本願まことにておはしまさば……』と人を超えて如來の本願を掲げられました。見よ！其處には、地上一切の證明もなければ、煩はしい説明もない。彌陀の本願はこれ絶對の眞理である。『疑を除き證を獲しむる眞理』であり『惡を轉じて德を成す正智』であつた。よろずのことみなもつてそらごたはごまことあることなき世界に、唯一のまことは

如來であり念佛であつた、如來は常住であり不變である。絶對であり、眞實であり、金剛であり、畢竟依である。

釋尊を信するが故に、彌陀を信するのではない。法然を信するが故に、如來を信するのではない。善導の古今楷定の妙釋にほれるが故に如來を信するのではなくあつたのであります。

彌陀の本願は、それ自身において『まこと』である。この彌陀の本願をまことと信するが故に、釋尊を信じ、善導を信じ、法然上人をまことなりと、信するのであります。

彌陀の本願まことなるが故に『釋尊の説教虚言なるべからず。』と信じ、彌陀の本願のまことを釋したまへばこそ『善導の御釋そらごしたまふべからず。』と斷言し『法然のおほせそらごとならんや。』との仰せも、畢竟彌陀の本願のまことを示したまひしがためでありました

私は今はからずも、遠き三千年の昔、大無量壽經を説きたまひし、靈鷲山上の會座における釋尊を憶念致します。

常隨の弟子尊者阿難が、釋尊の御相好を仰いで申し上げます。

『今日世尊は、諸根のごともかも悦びに輝き、お肌も清淨に、容顔は崇高く光を放ち給ひ、澄みきつた鏡の裏と表とが、すぎとほるようにならせられる。威容の妙にして勝れ給へることは、何んとも申し上げることも出来ませぬ。私は長い間お側にまつき申しておつたけれど、かような殊妙なる御相好はいまだかつて一度も拜み奉つたことがありますぬ。』

世尊よ、私は思ひます

世尊は今日はまれな奇瑞な御相好をあらはしてゐらせらるゝ。今日世雄は衆魔を

制し、一切諸佛を念じたまふ普等三昧に入つてゐらせられる。今日世眼は人天を導いて涅槃に入らしめ給ふ導師の德行を行じてゐらせられる。今日世英は最もすぐれた智慧に住してゐられる。今日天尊は、自利利他まごやかなる悲智圓滿なる如來の徳を行うてゐらせられる。

三世の諸佛はみな御說法の時は、佛と佛と相念じたまふと聞きましたが、只今世尊も定めし諸佛を念じてゐらせられるに相違ありません。

かうした阿難の驚嘆からはからずも説かれたものは、如來の本願とお名號の成就でありました。大經をお説きになつた釋尊は、常の釋尊とは異つてゐます。いつもは法を念じ法を説く大聖が、今日は念佛します如來でありました。如來の本願を念じたまふ釋尊でありました。

何が故に光顔ことのほか、すぐれてまし／＼幾十年み側をはなれぬ阿難尊者すらおごろかすにはおられぬほど、諸根の全てがにこ／＼と笑み輝きたまふたか。

私どもが「コ」と輝かされるのは、「みたまされる」時だけであります。如來は如來の本願のみに満されてましたのでありませう。

私は親鸞聖人が信樂釋において『信樂といふは如來の満足。大悲。圓融。無碍の信心海なり。』と申されたお言葉と照しあはせて、ほゝねますにはゐられませぬ。

信樂とは、如來の満足の………信心海………

大經の會座における大聖釋尊はこの久遠の如來の信心海を。感得されてあつたのでありませうさうして心から聖なるみ法に輝きたまふたのでありませう。

『彌陀の本願まことにておはしまさば、釋尊の説教そらごとなるべからず……。』

この聖人の權威あるお言葉を心から頂かすにはゐられませぬ。釋尊の説教以前に、彌陀の本願こそ眞實であらねばなりませぬ。一如も如來も、本願も、それは、時と處と人を超えて、しかも人の上に生きます。釋尊があつて成立するものではなくて、むしろ、この唯一の眞實が釋尊を生み出したのであります。このように教へられた時

我等は釋尊を超えて、眞の救主にてまします、久遠の本願を發見して、發遣の主と、招喚の如來とをはつきりと教へてくれた、次第相承の高僧たちに、感謝せずにはゐられませぬ。

かくて釋尊こそは生死海に立つて、行けと教ゆる大善知識にてましますのであります。

古今楷定の大師

『佛説まことにておはしまさば、善導の御釋をらごしたまふべからず。』

善導大師はすぐれた批判と、深い信念に生きた方でありました。大師は眞に觀無量壽經をよまれたお方であります。さうして玄義分。序分義。定善義。散善義等の觀經の御釋の書物を表はして、如來の救ひを凡夫のものとして下さつたのであります。

大師の御出世まで、淨影大師、天台大師等、聖道諸宗の方には、釋尊のほんとのみ

心をうけつがないで、彌陀のお救ひも、下品下生の凡夫がおめあてではなくて、上品上生の聖者こそ如來のみ國へ生れてゆけるように説かれたのでありました。随つて、七重の牢獄の中で大地の上に愚かにも泣いて救はれた王后、韋提華夫人も、決して凡夫ではなくて、求道過程における大聖の權化である。だから其得られた無生法忽のさとりも、凡夫には手のとどかない解行の上のさとりであるとせられたのでありました。然るに大師は、觀經の『如是凡夫心想口劣』のお言葉を生かして、韋提華夫人を聖者として見ずに、單なる凡夫、しかも心想のルイ劣る女性としてお考へになりました。阿彌陀如來の救ひ、それは決して、聖者や善人が本意ではない。苦惱の群生海を哀愍したまふ大慈は凡夫こそ、惡人こそ正客としてよびたまふことをはつきりと明されたのでありました。さうしてそれは、宗教價値の純なる發展であり創造でありました。天親菩薩や曇鸞大師によつてなされた觀念の宗教が決して間違ひではありませぬ。しかし觀念によつて、淨土を觀察し、散亂する心を止めるにはあまりに恵まれており

ませぬ。

善導大師のみ教は、如何なる惡人でも、お念佛一つによつて救はれる………といふ、地上最後の一人をも残されることのない、大道の顯現でありました。

如來の本願のみ手は、決して歡喜したり、わかたり、觀念をこらしたりした人間の皮相にまでしかとどいてゐないやうなものではない。罪惡生死の凡夫、出離の縁あることなき、いかりの炎と、むさぼりの大河、火と水の其唯中まで、無間の火の其底まで、どききつた大悲でありました。

人間のあらゆるはからひが、聖なる涅槃を創造しない。唯如來の本願のみが、衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心となつて、自然法爾に救はれてゆくのでありました。善導大師がなかつたならば、救ひが人間のものとはなりませぬ。かく考へる時、大師の偉れた功徳を聖人と共に『善導獨り佛の正意を明にす』とたゞねずにはゐられませぬ。

しかし大師が偉大であることによつて如來が成立つものではありませぬ。彌陀の本願まことにしておはしまさばこそ、大師があるのであります。如來は絶對であり、唯一の眞實であります。

親鸞聖人は如來廻向の信を通して、こそさら大師を讃仰されたのであります。さはさりながら聖なる殿堂の扉に耳をよせて、如來の胸底の久遠の秘密を、知りて我等が救はれる大道を示された、大師のお釋に對して心からなる合掌をさづけずにはゐられませぬ。

法然上人と時代

法然上人は『偏に善導一師による』とまでいはれたほど忠實に大師をつがれたものであります。

一体日本にはそれまで天台にも眞言にも念佛はありましたが、それは聖道の實踐的な行の一つにすぎなかつたのであります。獨立せる一宗として旗色鮮明に淨土教をたてられたのは法然上人でありました。

『本師源空世にいでて

弘願の一乗ひろめつゝ

日本一州ことごとく

淨土の機縁あらはれぬ

智慧光のちからより

本師源空あらはれで

淨土眞宗をひらきつゝ

選擇本願のたまふ。』(和讃)

と親鸞聖人は讃嘆しておられます。上人は『選擇本願念佛集』を著はして専修念佛の一行をすゝめられました。

『善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや。』

と聖人は仰せられたけれど、果して時代は眞實を眞實として受けたでありませうか。五濁惡世に相應した、人間の救はれてゆく道は念佛たつた一つである。聖道門を聞きて淨土門に入れ、雜行を抛て、正行に歸し、助業を傍にして、選んで正定業を專にする。正定の業とは、南無阿彌陀佛と、佛名を稱ふることである。佛の本願に依るのだから必ず往生することが出来る、專修念佛をおすゝめになりました。

しかし法然上人の御親切と、眞實は、もろくも、ふみにじられてしまつたのであります。

腐敗しきつた叡山、聖道の假面にかくれて、生命の枯涸した權勢と榮達と争闘にのみ惡僧ぶりを發揮してゐた叡山が迫害攻撃の刃をむけたのは勿論であります。

けれども更に、當時眞面目に佛教の眞髓を發揮して、世を釋尊在世の古にかへさうとした高僧にまで批難の矢をびかれたのであります。梅尾の明慧上人と、笠置の解脱

上人とがそれであります。明慧上人は『爰に近代、上人あり、一卷の書を作り、名けて選擇本願念佛集といふ。經論に迷惑して諸人を欺誑し、往生の行を以て宗となす。雖、反つて往生の行を妨碍せり。』といひ、十六ヶ條の過ありとて、主として、菩提心をもつて往生極樂の行とせざることをあげて、火のような、血涙を流さるような攻撃の書は發表せられました。更に南都の解脱上人は主として教化の方面より、嚴しい彈劾の矢をむけて來ます。

眞實を眞實として受取るには、すぐれた眼がゐることは勿論であります。其時代の皆が眞實だと承認する教ならまだしも、それがまだ社會的に疑はれ、或は批難攻撃の中にふみにじられようとする時、其中に血まみれになつても、眞實を受けついでゆくことは、まことに眞實にむかつて忠實な、そして何者にも妥協せない勇者でなくては出來ることであります。

法然上人の上に純化された如來の廻向の救済は、まじりものなく親鸞聖人によつて

受けつがれました。そして親鸞聖人の著述である教行信證は、たつた一つの眞實を眞實として發揮せんがためのものでありました。同じ法然上人門下の人たちのうちにも様々と誤つた考への人たちがありました。内と外とに對しての顯眞實、それが單なる學問的になされずして、聖人の信仰の涙の記録として如來の大悲本願が宣説されたのであります。

『法然のおほせそらごとならんや………』

とは決して法然上人のお言葉のみを認容されたのではない。人格の輝きに目がくれたのではない。其胸底に動く信の輝きをつきとめて、師の上に如來の活ける本願をみられたのであります。其一宗を開始されたことでも決して、法然上人の技巧とは見られない。『智慧光のちからより、本師源空あらはれて、淨土眞宗ひらきつゝ、選擇本願のべたまふ。』如來あつての法然上人でありました。かくて聖人は善知識をこゝて如來の大信海に直參せられたのであります。

教にむかつては從順な求道者であらねばなりません。しかし信の世界は金剛であります。

『法然のおほせまことならば、親鸞がもうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふか。』

こゝに聖人は御自身の信仰を眞實であるといはれました。しかしそれは、如來の本願まことにておはします故であります。

何物をも持たない、從順には、生命がありませぬ。といつて如何なる教化をも受け入れぬ堅信は、我執であります。我等は、我執を信念とあやまり、無生命の盲信を從順と間違ひます。聖人は今や、權威者の如く關東の同行にむかつて叫ばれました。其處には何物をも説破する權威の光が輝いてゐます。

噫、如來大悲は、釋尊・善導・法然・親鸞と昔代の上に流れつゝ遂に、凡夫下劣の我等の上にまで絶對の信心と念佛を廻向して下さいました。人間の最後の一線に立つ

た者まで、攝取して捨てたまはぬ大悲の恩徳を感謝し、合掌いたします。

聖人の悲涙

『詮するところ愚身の信心におきてはかくの如し。この上は念佛をとりて信じたてまつらんと、またすてんとも面々の御はからひなり。』

關東の同行に對する最後の答へは實にこの一言でありました。如何にも無慈悲な御言葉のように拜せられます。『要するに私の信心はかくの通りである。この上は念佛を信するか、棄てるかは各々方の自由である。』との仰せであります。

其號には強ひられた何ものもありません。全くの自由であります。我田引水のかたよつた主張ありません。と云つて何宗だつて同じたかねの月だなどと、大ざつばにかたずけてしまつたのともちがひます。

關東の同行と同じように、無智なる凡夫は、色々な思想の上を、これからあれへ、

あれからそれへと、流轉します。中心のものにふれずして、説教から説教に、人から人へと移つてゆきます。しかしそれは、如來を誠に知らぬからであります。自分を眞に知らぬからであります。

親鸞聖人は隠顯といふことを申されました。それは觀無量壽經の表には、定散の自力によつて淨土に往生する道が顯はされてあるから、それを顯といひます。しかしその裏には、絶對他力の本願が隱密のうちに彰されてあります。

今聖人のこのお言葉を拜する時、表に出た言葉は、『面々のおんはからひなり。』とつきとばされてあるように感じますけれど、其裏には涙に、じむ大きな光明と慈愛とで抱きしめられてあるのを感じます。

釋尊は『往き易くして人なし』と歎せられ『我是利を見るが故にこの言を説く』と仰せられました。釋尊の切々たる御慈悲でゆります。今聖人の、この上は念佛をとりて信じたてまつらんと、すてんとも………と仰せられるのを拜讀する時

釋尊のお言葉と同じ。御慈悲が私たちを攝取してゐられるのを感じないではゐられませぬ。

關東の同行たちは、はつきりと寂しい人間の相の上に恵まれる唯一の救ひを得得し人間の行かねばならぬ眞實道を諦観して關東にかへつたことでありませう。(をはり)



最後の日

住 岡 狂 風

□

元暦二年三月二十四日

源平二氏は西海壇浦にこゝを最後と戦ふてゐる。しかしもう戦の数は決した。源氏の兵は平家の船に乘移つて来る。水主どもは或は射殺され或は斬殺されて、もう船は動かない。

『新中納言知盛の卿、小船にのりて急ぎ御所の御船に参らせ給ひて、世の中は今かくと覺え候。見苦しきものどもをば。皆海へ入れて、船の掃除めされ候へどて、掃いたり、拭いたり、塵ひろい、舳艫に走りまはりて、手づから掃除し給ひけり。………二位殿(平清盛の妻)は、日比より思ひ設け給へることなれば鈍色のこぎぬ打ちかづき、ねり袴のそば高くどり、神璽を脇にはさみ、寶劍を腰にさし、主上(安徳天皇)を抱き参らせて、我は女なりども、敵の手にはかゝるまじ、主上のお供に参るなり。御志思ひたまはん人々は、急ぎつゞき給へとてしづ／＼と舳へど歩み出でられける。主上今年は、八歳にぞならせおはします。御年のほごより遙にねびさせ給ひて、御かたちいくしく、傍も照り輝くばかりなり。御髪黒

くゆら／＼と、御背中過ぎさせ給ひけり。主上あきれたる御有様にて、そも／＼あ
ませ(あませとは尼御前のこと)我をば何地へ具して行かんとはするぞ、と仰せけれ
ば、二位殿幼き君に向ひ参らせ、涙をはら／＼と流して、

「君は末だ知し召され候はずや、先世の十善戒行の御力によりて、今萬乗の主とは
生れさせ給へども、惡縁にひかれて、御運既につきさせ給ひ候ひぬ。先づ東に向は
せ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させおはしまし、其後西に向はせ給ひて、西方淨土
の來迎にあづからんと、誓はせおはしまして、御念佛候ふべし、此國はたくさんの
へんご、申して、物憂き境にて候、あの波の上にこそ、極樂淨土とてめでたき都の
候、それへ具し参らせ候ぞ」と

様々に慰め参らせしかば、山鳩色の御表にびんづら結ばせ給ひて、御涙におぼれ
小さく美しき御手を合せ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮、正八幡宮に御暇申
させおはしまし、其後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位殿やがて抱き参

せて、波の底にも都の候ぞと慰め参らせて、千尋の底にぞ沈み給ふ。
悲しきかなや、無常の春の風、忽に花の御姿をちらし、いたまじきかな、ぶんだ
んの荒き波、玉体を沈め奉る。……………』(平家物語)

□

盛なる者は必ず衰へる。

哀れ、平家の末路の華々しくも亦尊ことよ。

保元の亂の方、住みなれし花の都も、今は木曾の冠者義仲の粗野に荒されて、一
門こと／＼主上西海の御幸に随ひたてまつる。

一の谷の戦にもやぶれ、屋島にも、寶駕ながくとゞめさせられず、幾多の哀話を綴
りつゝも、壇の浦に潔く滅ぶ。

滅ぶものは滅ぶ。

しかも其滅ぶ日に從容として亂れず、自若として其道を守るは、我が武士道の生命ではなかつたか。我、盛なるものを、必ずしもほめたゝえず、衰へるものを必ずしもさげすまず治亂興亡は生死苦海の一時の相にすぎない。

榮々しものは如何にして榮々しか、衰へるものは如何にして衰へしか、其間に輝くものは何ぞ、其すがたは如何に、

至て最後の日のすがたは悲劇である。其處に涙があり、血がある。

悲劇の中心は苦惱である。詩もこれあるがために生れ。藝術もこれに生命を持つ。

宗教にいたつては、苦の中に試練されず、苦の中より生み出されないものであるならば、それは一片の閑人の閑葛藤である

□

平家の一族はことごとく都を落ち。

薩摩守忠度は、どこから歸つて來たのか。五六人の侍をつれて、五條の三位俊成卿の邸の前に立つた。門は閉ぢられて開かない。落人がかへつたどて、何だか内はさばかしい様子、忠度は馬よりおりて、高らかに申される。

『外の者ではありませぬ。忠度、三位殿に申すべきことあつて、引かへしてまいりました。三位殿に是非お願いがあります。假令門は開かれずとも、この所まで御出で下さい。』

忠度とわかつて、門は開かれて、對面される。

話の要点はこうである。

『御無沙陀のみでありました。いよく、君には帝都を出させたまひ、平家一門の運命もはやつきはてしました。つきましては、以前、勅撰の和歌集が出来るといふことを聞きました、生涯の面目に一首でものせて頂きたいと存じておりましたが、こんな亂世になつて、其お沙汰がなくなつたことは嘆かましいことであります。こ

の後世が静まつて、撰集の御沙汰がございましたらこゝに、持参しました巻物の中に、日頃詠みおいた歌ごもの中から、秀歌と思はれるもの百餘首ほど書き集めてありますから、一首なりともおのせ下さるならば、後の世の思出ともなりませう。』とて巻物を出された。俊成卿はこれを聞いて

『かゝる忘れがたみごもを賜りました上は、ゆめ／＼疎略は致しませぬ。さてもさても其心根、情も深く哀も殊に勝れて、思はず涙いたしました。』

と宣へば、薩摩の守は

『今はもう、屍を山野に曝しませうとも、浮名を四海の波に流しませうとも、浮世に思ひおくこともありません。さらばお暇申します。』

とて西の方に馬を急がせました。今はのきはに、和歌を知る人に托して死出の旅につく心根、花の都の最後の日は悲しくも哀れである。

やがて千載集が撰れた時、よみ人知らずとして載せられた一首は、忠度卿の歌

であつた。

さゝなみや志賀の都は荒れにしを

むかしながらの山ざくらかな。』

□

何事でも終極が近づいた時、其人や、其世界に内在する眞の相が赤裸々に表されるに、日本帝國の最大の悲痛、それはやんごとなき、かみ御一人の御上に御不幸があつた時である。

私は、明治大帝が神去りました時、夏休暇の歸省中であつた。いよく大帝崩御を家内中に語ると皆で泣いたことをおぼえてゐる。大正天皇の御病狀を汽車の中で新聞記事によつて拜した時に、とめどなく涙の流れるのをどうすることも出来なかつた。

大正天皇は崩御遊ばされた。

御大喪もおはらせられて、玉体は、永久に御陵の奥深く大行幸あそばさす。

玄宮内の作業に奉仕した森技師譚話の一節を共に拜讀しよう。

『悲しみの夜は、烈しい寒さと共に明けようと致して居ます。』

六殿下の御眼は、いま御ふた石の作業を終れたばかりの見るからにヒヤリとする大石櫓の上い注がれ御丁重に御頭を下げられつゝ暫しは御立ち去らせかねる御様子に拜しました。併し時は参りました。今こそ永久に開かれざる御玄扉を閉る時です杉諸陵頭は意を決し、低い聲で

『殿下御玄宮の御門を閉じてよろしうございますか。』

と申上る、東の空は全くだい／＼色に染まり、金色の太陽は、燦爛としてのぼりました。此時、云葉にも現されぬ一大悲しみがこゝにあるとは誰が知つてゐるでせう杉さんの云葉が終ると共に、あの凜とした、秩父宮様にも、なんにも仰せにならないで御背後の高松宮殿下に一寸御まなざしを向けさせ給ひました。

ほんのちらと御振向きになられた其の御有様は、いかにも盡きせぬ御名残を惜まるゝが如く、兩殿下にはお互に二三度御うなすき合ひ、御眼と御眼とをひたと御見合せになつて、御兄弟宮殿下には再び御うなづきになつた。秩父宮殿下には、申すも畏きことながら、御無言で、杉諸陵頭に御うなづき遊ばされた。時の進行は無情と申しませうか、杉さんは進んで、永久に開かれぬ鐵扉に手をかけた。六殿下も玄宮上の諸員も息を呑む。私と和田技手は杉さんに手傳つて、三十貫の中央に金色の御紋章輝く御扉を全身の力を出して押した。あゝ、もう之が最後であつた。

ピーンといふ音は玄宮内に響く。其音を吾々はわかへる心臓に固く固く御受け申しました、時に午前六時五十分でした。(東京朝日新聞による)

噫。何といふ悲痛だらふ。畏れ多くも嚴肅な事實であらう。

『ピーンといふ音』それは國民全体の胸に共鳴する響ではないか。

皇室に對し奉る國民の忠誠は、國民各自の底に流れてゐる。

外國の惡思想が、日本の中にも流れて來た。さうして同胞のほんの僅かゞ、この狂的な考へを實行に移さうとした。共產黨事件がそれである。

如何なる眞理であらふと、名論であらふと、日本國土では、君を思ふ忠君の本流に融合されないものであるならば、それを奉ずる者の末路は衰れにおはる。

足利尊氏が出でたが故に悲觀するよりも、楠公を生む處に日本の光輝がある。

日本の前途を危む者がある。しかし私はそれを信じない。

□

最後の日！

其處にものゝ本質と赤裸々な相が表はれる。

『おちぶれて袖に涙のかゝる時、人の心の奥ぞ知らるゝ』
盛なる時に追従する者は多い。零落の日に共に手をとつて泣く人は少い。

三百數十人の家中から、四十七士を出した赤穂藩は、それだけで萬丈の氣焰である

□

承安四年、法然上人一たび黒谷をいで、京都吉水に念佛易行の大道を宣べたまふや、其名聲は日本國中に傳つた。念佛の大法は草の風になびくが如く『農夫がすきをふかむ念佛をもつて田歌となし、織女が糸を引く、念佛をもつてたてぬきとす、鈴を嘔らす驛路には、念佛を唱へて鳥をどり、船ばたをたゞく海上には、念佛を唱へて魚をつる。雪月花をみる人は、西樓に目をかけ、琴詩酒を弄ぶともがらは、西の枝の梨子を折る。』とか

南北の僧徒とても人である。嫉妬の刃は、この吉水の上にむけられ。時も時とて、女官たちの出家は、はしなくも上の御憤にふれ、遂は吉水の教團はふみにじられて、念佛禁制の札は高くかゝげられた。

哀れ打首、流罪、大地の上は痛ましくもためされる日がきた。
 法然上人を思ひ奉る弟子たちは上人をどひ。

『何卒、今暫くの間、朝暮の御念佛をやめさせられたまへ、然れば事も静まるでございませう。御老体ゆゑ都に住はせ給はねば……………』
 と申しあげると、善慧坊其他の一座の人々にむかつて。

『汝等は經釋を見ないのか。』

假令源空は之がために死刑に處せられるとも變することはできない。よし我否は念佛を稱へるによつて寸斷さるゝ事があつても、如何で念佛を止めることが出来ようか、考へても見よ。今日我が弘通する所の念佛は、まさにこれ大聖世尊の出世の本懷ではないか。十方恒沙の諸佛も既に之を證誠し善導大師は本願の念佛を往生の最要と教へ給ふたではないか、我は今その流をくむ身でありながらどうして念佛を行せないでゐられるか。驛路はこれ聖者のゆく所である。配所はまた權化の住所であ

る憂ひとするに及ばず、悲みとするに足らない。邊卑は未だみ法に沿してゐない。流されることによつて邊鄙の群衆の濟度ができるならばこれにこしたことはない。これ悦びであつて悲しみではない。

念佛は行者の生命である。終日行すれども自の行を行するのではない。正覺の全生命は、行者の念佛の根底である。念佛の聲のする所、其處こそ如來のまします所である。

さはさりながら、愛別離苦は凡夫にとつては最大の苦惱である。

花が散るように、師も弟子も散つてゆく、吉水最後の日を思つて涙せぬものがあらふか。

形の上で吉水教團には最後の日がきた。形がこはれた時、惡魔はものすごく笑つたであらふ。

しかし眞實なるものは、其形の興亡を越えて生へぬ。

一切人の上に死がくる。

病が重くなる。借物も駄目、化粧も駄目。赤裸々な人間が横たはる。

名譽、地位、財産そんなものが遠のく。

子供 妻 夫 親 友人それらの手がごさかぬ世界の門がひらく

醫者 看護婦 藥 食事、それが間にあはぬ。

たつた水數滴が唇をうるほす。

其最後の日に何があらふ。

佛のまへにもちだされるもの、お淨土まで末通るもの、持合せがあらふか。

最後の日、寂しいけれどこの言葉は、私に深い内省を與へてくれる。さうして私にほんごうの生き方を教へる。



惡魔

惡魔よ

お前はあまりに執拗だ

どこまで俺を苦しめるのだ

何時まで俺を苦しめるのだ

等活地獄！

頭より足の先まで

打つてくうちくだかれて

骨が沙つぶのようになる

割いて切られて

肉といふ肉が寸断される

惡魔よ！

汝のたつた一つの能は化けることだ

お前は時に本尊に化けた

一切衆生の拜まねばならぬ本尊の姿に

善人のように化け

賢者のように化け

それでも俺は死にきれない
一寸の間涼しい風が吹けば
俺は又もどのように活きかへる

さうした時の獄卒とは

惡魔よ 汝のことだ

聖者のようにばける

化かされた時、ばかされたことさへ知ら
ない。

さうしてこれまでお前に化かされ迷はさ
れてきた。

お前は時に高慢山の頂につれて行つた
弊惡卑怯の谷底に誘いこんだ
其度に勝利者の如く自惚れたり
囚人の如く暗い心になつたりする
三千世界が火の海になつたり
氷のような冷たい世界に變つたり
墨のような暗黒がおとすれたりした

それも皆汝自身の仕草であつた
化かされてゐたのだ

惡魔よ！

汝にはたつた一つの禁物がある

それは光なのだ

光の前には正体があらはれる

だからお前の樓家は暗なのだ

如何なる所にも闇がある

闇の中には汝がある

お前はかうして俺を

闇から闇にひきまはした

光の世界だどだまして

しかし私はもう知つたのだ

お前のたつた一つの嫌なものを

惡魔よ！

汝は俺をさんく苦しめておいて

猶わしをだましておつた

おかげで俺を苦しめる者は

或時は運命だと思つた

或は兄弟だ、親だ、妻だと思つた

しかしそれも今わかつた

みんな お前の仕草だつたのだ

俺はしかしもう一つ知つた

俺はお前を俺と別なものとと思つてゐた

汝 惡魔よ、汝は俺そのものだつたのだ

しかし俺はもう汝にだまされはしない

汝の一番きらいな 智慧光の前に

其正体が引き出されたのだ

もうお前がわしの主ではない

お前は家來なのだ、しもべなのだ

お前の上に君臨した

聖なる『無上尊』こそ

我といふ家の主である

講演のたび

四月四日から三日間熊野支部では大会がありました。講師は二川凌雲師と豊田さんと松本さんと、本部から松浦さんと私も都合五人です。それ／＼特色の

ある人が集つて妥協なしの語でしたから面白かつたのであります。殊に私は二川氏と心から受けあふたことが嬉しう思ひます。二川氏は自分でも「人あたれば人を斬り、馬あたれば馬を斬る」と云ひます。批判の鋭い人であります。しかし求道の人であり、自分のまゝを投げだす人であり。共鳴すれば涙して喜ぶ人であります。決して主義の人ではありません。

七日の朝たつて美から船にのつて能美島についての夕方でありました。川藤さんの宅で静かな會でありました。三四十人のきまつた人たちと一緒に味つてゆくのは一番嬉しいことであります。島はまだ／＼進ま

ねばなりません。何でもないので一寸變れば敵として見る所であります。

十二日十三日は山口縣の厚狹町の佐藤若松氏宅で夜だけ座談を致しました。

十三日の夜行で下關市に來ました。名池山の佛教會館です。皆様の温い空氣と／＼つくりした三日間を恵まれました。十六日午前中は長府の乃木神社に參拜しました。乃木家の舊邸は六疊と三疊の二間です。大將の父君と母君と幼時の乃木將軍と三人の木像の前に昔がしのばれて涙しました。この粗末な小さな家から世界的な將軍をだしました、乃木せんべい、乃木まんじゅう、長府の人たちは大將の名で食つてゐます。十六日最終列で皆様とお別れしました。朝廣島につきます。【以下次號】

注意

- 一。誌代拂込の際は光明と聖光との區別をはつきり記すこと。
- 一。願居通知は新聞同住所を書いて下さい。
- 一。誌代拂込は振替を御使用下さい。切手は使はぬこと、やむを得ぬ時は五厘か貳錢切手に限ります。
- 一。文字をはつきり正確にお書き下さい。
- 一。主管に特別の用事の外、由込、中止、送金等は一切事務宛に御送附下さい。
- 一。誌代前金切の時は、どうかお早く御送金を願ひます。お困りのお方は其御旨申越して下さい。

本誌定價

一部 金 十 錢 (郵税共)
一ヶ月 金 壹圓貳拾錢 (郵税共)

昭和三年五月十日印刷
昭和三年五月十五日發行

編輯兼發行人 花岡 靜人
印刷 人 佐々木温三
印刷所 光明團印刷部

發行所 廣島市八丁堀二十六番地
光明團本部

標榜 全口座下關部全〇八番